

國學院大學學術情報リポジトリ

梅娘ら『華文大阪毎日』同人たちの「読書会」による
翻訳特集の詳細：隠された反日性を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-10-22 キーワード (Ja): 『華文大阪毎日』, 「満州」, 翻訳, 編集者 キーワード (En): 作成者: 母, 丹, Mu, Dan メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000957

梅娘ら『華文大阪毎日』同人たちの「読書会」による 翻訳特集の詳細

—隠された反日性を中心に—

Details of the special feature on translations by Meiniang and other

Kabun Osaka Mainichi coterie members' "book club":

Focusing on the hidden anti-Japanese tendencies

母 丹

キーワード：『華文大阪毎日』 「満州」 翻訳 編集者

Key Words: *Kabun Osaka Mainichi* "Manchuria" translation editor

要旨

戦時下において、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社によって発刊された、『華文大阪毎日』という華字雑誌が注目に値する。本来「親日防共」をスローガンとする、戦争遂行に文化面から寄与するこの国策宣伝雑誌には、「親日防共」に迎合するものだけでなく、それに反する「異色」、つまり抗日的な傾向も見られる。特に外国文学を紹介・翻訳するコラムにおいて、こういった「異色」は非常に顕著である。本稿は『華文大阪毎日』における翻訳文学のテキストとパラテキストを詳しく分析し、そこに現れた反抗性のあり方を考察した。文学を通じて愛国心を表す中国の文化人たちが提供した翻訳作品は「異色」の源であるが、それらの作品の無事な発表を確保した、カモフラージュ、あるいは後ろ盾のような存在も無視できない。本稿はこれらの後ろ盾についても考察を試みた。

Abstract

During the war, a Chinese-language magazine called *Kabun Osaka Mainichi*, published by Osaka Mainichi Shimbun and Tokyo Nichiichi Shimbun, deserves attention. This national policy propaganda magazine, which originally had the slogan "pro-Japanese, anti-communist," and contributed culturally to the war effort, not only contained items that catered to the "pro-Japanese, anti-communist" cause, but also had "unusual" tendencies, that is, anti-Japanese tendencies. It will be done. This "uniqueness" is particularly noticeable in columns that introduce and translate foreign literature. This paper analyzes in detail the text and paratext of translated literature in *Kabun Osaka Mainichi* and considers the nature of rebelliousness that appears there. The translated works provided by Chinese cultural figures who express patriotism through literature are a source of "uniqueness," but we cannot ignore the existence

of a camouflage or backing that ensured the successful publication of these works. This paper also attempts to consider these supporting factors.

はじめに

盧溝橋事件の勃発から一年あまりが経過した1938年11月1日に、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社によって『華文大阪毎日』（以下、『華毎』と略す）という華字雑誌が発行された。雑誌は主に大阪で編集され、日本の影響下にある中国の東北・華北・華中（いわゆる「淪陷区」）に売り出されていた。『華毎』は本来「親日防共」をスローガンとする、戦争遂行に文化面から寄与する国策宣伝雑誌であったが、発刊よりおよそ一年後、大東亜主義をはじめとする日本側のイデオロギーを一方的に押し付けるだけでは、中国人読者に受け入れられないことを、編集部が認識したのである。そこで、1939年11月1日刊行の第3巻第9期の巻頭において、編集主幹の平川清風執筆の「創刊一周年感言」が掲載されており、雑誌の編集方針の変化を仄めかす文言が書かれている。

我々の雑誌は日本政府の御用雑誌でもなければ、日本軍部の機関誌でもない。我々は次のような信念に燃えている。我々は東亜民族の一員として自由な立場（下線は稿者による、以下同）で互いに理解し合い、手を携えて戦争状態から脱し、東亜の暗雲を一掃し和気藹々とした東亜の平和を招いて、世界に誇れる中日文化の提携を図るという大きな目的に向かい、懸命に努力前進したいと願っている。⁽¹⁾

その後、『華毎』の内容に変化が見られ、編集側は読者から意見を募ったり、誌面の1/3を「文藝欄」に充てたりして、中国人読者の興味を引き付けるように努力したことが明らかである。

また、編集側の話になるが、『華毎』の編集長（三池玄作夫）や編集主幹（平川清風）は日本人だったが、具体的な仕事を担当する編集者は大半が中国人だった。

(1) 日本語訳は南雲智ほか「『華文「大阪毎日」』短編小説案内(1)」(東京都立大学人文科学研究科人文学報第341号、2003年3月)による

編集者たちの働きにより、『華毎』の「文藝欄」は必ずしも大東亜主義などに迎合するものではなく、ある程度の自由が保たれていた。特に柳龍光という編集者且つ文化人は妻の梅娘⁽²⁾とともに「読書会」のようなものを作り、その「読書会」のメンバーたち——柳龍光⁽³⁾、魯風、雪螢、張蕾、梅娘、白樺、但娣という7人の日本滞在中の「満州」出身者⁽⁴⁾——は『華毎』において「海外文学選輯」「日本現代詩選譯特輯」という2つの翻訳特輯を担当した。この二つの翻訳特輯の基本情報については、羽田朝子による先行論「梅娘ら『華文大阪毎日』同人たちの「読書会」：満洲国時期東北作家の日本における翻訳活動」（『現代中国』第86号、2012年9月）があるが、本論では具体的な紹介文と訳文にしぼり、特に特輯に隠されている、「親日防共」に反する異色なものに着目する。

一、「海外文学選輯」

「海外文学選輯」は第5巻に掲載されており、『華毎』における最も系統的・規模的な欧米文学コラム⁽⁵⁾となっている。選輯は6回に分けられ、ジッド・ヘッセをはじめとする6名の欧米作家とその作品を紹介した。毎回の「選輯」は作家紹介の文章1篇（作家の写真付き）と作品の翻訳2、3篇からなっており、4～6ページの紙面を占めている（雑誌全体は50ページ余り）。翻訳作品の詳細は表1の通りである。

「海外文学選輯」において「異色なもの」が現れたのは、その奇数回の1、3、5回目であり、具体的な内容は下記の通りである。

1回目はフランスのジッドを取り扱っており、作家紹介の文章「A・紀徳和他的作品」（雪螢）において、ジッドは1931年に共産主義者になったと明記されている。また、ジッドの作品としては「藝術的界限」と「一九一四年大戦日記」が取り上げられている。この2篇の中で、魯風訳の「一九一四年大戦日記」は題名通り1914年の第一次世界大戦を記録したものであり、戦争による破壊や戦争の残酷

(2) 中国東北出身の有名な女性作家である。

(3) 柳は紅筆、糸己という2つの筆名を持っており、混乱を避けるため、本論では彼を本名「柳龍光」で呼ぶこととする。他の執筆者は筆名で呼ぶ。

(4) 当時柳龍光、魯風、雪螢、張蕾は『華毎』の編集者で、白樺と但娣は留学生であった。

(5) もっとも、選輯の予告においては、「系統立てて紹介するというよりも、「拾遺」というほうが適切」という謙遜な表現もある。

表 1

刊行時期	巻-期	紹介された作家	翻訳作品名	原作名	訳者
1940. 7	5-2	(仏) ジッド	藝術の界限	Les Limites de l'art	白樺
			一九一四年大戦日記	Journals	魯風
1940. 8	5-4	(独) ヘッセ	詩人	Der Dichter	魯風
			奇妙的故事	Ein Mensch mit Namen Ziegler	梅娘
1940. 9	5-6	(米) ロンドン	地獄人群	The People of the Abyss	雪螢・魯風
			白狼	White Fang	張蕾
1940.10	5-8	(露) レールモントフ	搭瑪尼	Тамань	白樺
			抒情詩抄	Стихотворения	柳龍光
1940.11	5-10	(英) バイロン	Childe Harold 的巡礼	Childe Harold's Pilgrimage	白樺
			抒情詩抄	Lyrical Poems	白樺
1940.12	5-12	(伊) ピランデルロ	密友	Amicissimi	蕭然
			最好再想一遍	Pensaci, Giacomino!	劉針

さといった表現がそのまま訳出されている。さらに、羽田朝子の考察によると「一九一四年大戦日記」は、新庄嘉章訳「大戦日記」を底本としているが、新庄と魯風のバージョンを比較すると、魯風が終わりの1節を、抗争への激しい呼びかけとも読める文章に書き換えたことがわかる。

新庄：

今度の戦争は今までの戦争とは全然違つてゐる。土地を守るとか、財産を守るとか、傳統を守るとか、そんなことはてんで問題ではない。さうだ！巨大な未來が生まれようとしてゐるのだ。足を血まみれにしつつ身を振りほどかうとしてゐるのだ。（新庄嘉章訳「大戦日記」『改造』21巻11号、1939年10月）

魯風：

這次戦争與以往的戦争全然不同。守着土地，守着財産，守着傳統，這種事情絲毫不成問題。是呵！為着要生出那巨大的未來，腳塗着血，振起身子來幹！（魯風訳「一九一四年大戦日記」『華文大阪毎日』第5巻第2期、1940年7月）

拙訳：

今度の戦争は今までの戦争とは全然違っている。土地を守るとか、財産を守るとか、伝統を守るとか、そんなことはてんで問題ではない。そうだ！巨大な未来を生むために、足を血まみれにしつつ身を振るってやろうじゃないか！

魯風訳の「譯後記」も、新庄訳の「後記」を元としている。ただし、新庄訳と違い、魯風訳には日付表記も付けられている。しかも通常の表記ではなく、「一九四〇法降德意之日譯」、つまり「フランスがドイツに投降した日」というメッセージが込められたものとなっている。そのメッセージは魯風が故意に入れたもののだと考えられる。この特殊な日付表記には、中国人と同様に祖国を占領されたジッドへの共感が含まれると言えよう。

3 回目はアメリカの作家ロンドンを扱い、作家紹介の文章「生活的探求——關於J・倫敦」（柳龍光）において、ロンドンのアメリカ左翼文学の先駆者と、社会主義者の身分が言及されており、作品の翻訳としても貧民の飢餓をテーマとする「The People of the Abyss」が選ばれている。

5 回目はバイロンが登場する。バイロンの紹介文「拜倫的一生」（梅娘）のなかで、彼は「自由主義者」「革命の先駆者」だと語られており、ギリシャの独立運動に投身したという情報もそこに付けられている。作品としては出世作——長詩「Childe Harold's Pilgrimage」の一部が、白樺により訳されている。⁽⁶⁾ 自由への熱愛、抗争への呼びかけを基調とするこの長詩の中には、反抗精神が多く見受けられ、特にアルバニア人の歌を記録した1 節において極めて顕著である。訳者白樺はこの「仇討ち」をテーマとするアルバニア人の歌を借り、中国の人々に向かって「反抗しよう」と発信していると考えられる。

原文：

Shall the sons of Chimari, who never forgive The fault of a friend, bid an enemy live? Let those guns so unerring such vengeance forego? What mark is so fair as the breast of a foe? (Lord Byron『Childe Harold's Pilgrimage』研究

(6) 白樺はこの訳詩に多くの「註」をつけており、しかもほとんどが英語の原文に中国語の翻訳・解釈を付けるという形になっている。そのため、「Childe Harold 的巡礼」は日本語からの重訳ではなく、英語の原本を底本としていると判断できる。

社、1922年1月)

中国語訳(白樺):

永不饒恕朋友過失的凱馬瑞的子孫，怎能放鬆敵人的性命？照準無誤的炮火豈能把復仇拋棄？還有什麼標的，勝過敵人的胸臆？(白樺譯「Childe Harold 的巡禮」『華文大阪毎日』第5卷第10期、1940年11月)

参考としての日本語訳(片山):

友の過失だに宥さざるキマリ人ら、仇の生命の永らへることをなぞて許すまじきぞ。狙ひ違はぬその銃に、復讐のころ忘るべくもあらず、仇の胸にも勝りてこよなき標的はあらじ。(片山彰彦訳『バイロン詩集』京文社書店、1939年1月)

以上で整理した文章の中で、反日・反戦的な傾向だけでなく、共産主義に関する発言、言い換えれば共産主義への親しみも見られる。つまり、「海外文學選輯」においては、『華毎』が主張する「親日防共」とは真逆の、「親共抗日」とも言える政治的傾向が現れているのである。それに引き換え、偶数回の2、4、6回目は単純な外国文学の紹介となっており、反日・反戦性が見られない。それは選輯全体の反日・反戦性を際立たせないための策略かもしれない。それから、ほぼ同様な執筆陣により訳され、しかもほぼ同じ時期に掲載された「日本現代詩選譯特輯」にも、こうした「異色」が見られる。

二、「日本現代詩選譯特輯」

「日本現代詩選譯特輯」の連載が始まる前に、柳龍光執筆の「緒言」、という興味深い文章も掲載されているため、最初にその内容を確認しておこう。

「緒言」において、柳龍光はまず「詩の社会的効用」のみに着目した詩人たち(戸室屈山、兎玉花外、石川啄木、プロレタリア詩人など)の欠陥を指摘し、欠陥の原因を「内的開拓の不足」に帰している。その「内的開拓」とは、自我の感情を解き放つ、つまり、「抒情」のことである。したがって柳は「詩の抒情的な美」に力を入れた詩人たち(北村透谷、島崎藤村、蒲原有明、与謝野鉄幹、萩原朔太郎な

ど)を評価している。ただし、詩における社会性を、柳は否定するわけでもなく、「社会性」と「抒情的な美」をうまく結びつけた詩人たちをも肯定している。その例として、プロレタリア文学から出発したが「抒情的な美」を守り続ける中野重治と、社会性を背景において抒情する萩原朔太郎、草野心平を挙げている。文末では日本現代詩の伝統は抒情にあると結論付け、中原中也、草野心平、三好達治、宮沢賢治、北川冬彦、中野重治、萩原朔太郎を代表として選出し、彼らの詩作を紹介しようという意図を示している。そして具体的に翻訳紹介された詩作は下記表2の通りである。

表 2

刊行時期	巻-期	紹介された作家	訳者	翻訳作品名 ⁽⁷⁾
1940.11	5-9	中原中也	白樺	帰郷、少年時、心象Ⅰ、心象Ⅱ、秋、冬日的記憶、寒冷的夜(冷たい夜)、一個童話(一つのメルヘン)、月夜の濱邊
		草野心平	魯風	強烈的天、富士幻現、冰雨、石、秋、Beling-Fantasy (Bering-Fantasy)
1940.11	5-10	三好達治	但娣	鴉、信號、山慈姑(チューリップ)、鹿、運刻、土、庭、燕、涙、湖
		北川冬彦	雪螢	拾垃圾の人(芥溜を漁る人)、皮膚の経営、恋愛の結果、春、在小站熟睡了の人們(寒駅で眠つてしまった人々)、秋、高原地方、化石
1940.12	5-11	宮澤賢治	白樺	溶岩流、在車站上喫水團(停留所にてキストンを喫す)、異途の出発、原體劔舞連、作品第一〇八八番
		中野重治	張蕾	浦島太郎、白波(しらなみ)、明朗的姑娘們(あかるい娘ら)、眼晴里、植樹去(挿木をする)、別(わかれ)、離開水邊、望月(私は月をながめ)
1940.12	5-12	萩原朔太郎	魯風	晩秋、家庭、花鳥、天景、軍隊、在郵局的窗口(郵便局の窓口で)

柳龍光とその「読書会」のメンバーが選び出した「日本現代詩」は、「緒言」で書かれている通り、社会性と抒情性両方を備えた作品である。そしてその社会性は、「民衆の苦難への注目」である場合が多いが、戦争関連のものも少し混じっている。ここでは宮澤賢治の「原體劔舞連」と、萩原朔太郎の「軍隊」を代表として分析してみたい。

(7) 必要なところに原題を記している。

「原體劔舞連 (mental sketch modified)」の原作は、原體村の若者たちに向けて、熱い青春を「新しい星雲」の建設に捧げようと唱える詩である。また、「建設」のためには熾烈な戦闘に巻き込まれるがそれも辞さないという覚悟への呼びかけも詩に含まれている。この呼びかけが白樺に訳され、戦時下というコンテキストに置かれるとき、そのまま国土を日本軍に侵略されている中国人民に向けてのものととらえられる。

それから、白樺が翻訳する際、少し書き換えを施している。まずは「楡と栲とのうれひをあつめ」という一文であるが、中国語訳は「聚集楡和栲的末葉」となっている。白樺は「うれひ」を、「末葉」という全く関係のない言葉に訳したが、彼の日本語力がそこまで低いはずがないため、やや暗い「うれひ」を、新しい生命の象徴である樹木の「末葉」という、正反対なイメージに訳した背後には、彼なりの考慮があったと考えられる。イメージの正反対なコントラストは、実は原作にすでに出ている。前述の一文の前後の文脈は「気圏の戦士わが朋たちよ／青らみわたる瀧気をふかみ／楡と栲とのうれひをあつめ／蛇紋山地に篝をかかげ／ひのきの髪をうちゆすり／まるめろの匂のそらに／あたらしい星雲を燃せ」であり、「瀧気」と「うれひ」が正反対なイメージだと言える。原作において、賢治はその2種の異なる生命の形から力を借りて、「あたらしい星雲」を作る、と読み取ることができる。ただし、白樺がその表現を晦渋だと思ったためか、彼の訳文では、「瀧気」と似たようなイメージを持つ「末葉」が「うれひ」の代わりとなっており、「あたらしい星雲」のイメージと一貫させているように見える。この書き換えにより、白樺の訳文は単刀直入な呼びかけの詩となっている。確かに戦時下において、反抗・戦闘を呼びかけるには、そうした単刀直入さはより効果的だと想定される。白樺が書き換えを施したのも、そうした効果を狙っていたからだと考えられよう。

そのほか、「原體劔舞連」の訳文には原作からの大幅な削除も行われている。白樺は訳文の「附記」に、「為了難譯和難解，譯者在主流不失其連貫的範圍內，擅自在本篇裏刪去詩八行」（翻訳と理解の困難のため、詩全体の一貫性を損なわない範囲で、原文から八行の内容を勝手に削除させていただいた）と断っている。その削除された8行とは、「むかし達谷の惡路王／まつくらくらの二里の洞／わたるは夢と黑夜神／首は刻まれ漬けられ」と「青い假面このこけおどし／太刀を浴びてはいつぶかぶ／夜風の底の蜘蛛をどり／胃袋はいてぎつたぎた」という、「悪

路王」の断末魔を描いた部分である。この「悪路王」の8行は、詩のほかの部分と違い、節とオノマトペがつけられ、強いリズム感を持っている。それを中国語で再現することは、確かに非常に難しい。白樺の言う「翻訳と理解の困難さ」は、このように素朴に解釈できる一方、この「悪路王」の断末魔があまりにも残酷で血生臭いため、削除の背後には雑誌側からの干渉も考えられる。しかし、それ以外の原因は考えられないだろうか。とりあえず「悪路王」とは何かを確認しておこう。

達谷の悪路王【人】【地】達谷はタッコクとも。悪路王伝説の地名と人名。
(中略) 征夷大將軍坂上田村麻呂に成敗されたとされる前記悪路王には悪者のレッテルがはられているが、彼こそ侵略者と戦った郷土の英雄、とする反中央、反権力の見方もある、それらしく岩室には洞窟があり、深く暗く衣川に通じるとか気仙に通じるとか言われる伝説も残っている。(原子朗『新宮沢賢治語彙辞典』東京書籍、1999年7月)

岩手の土俗文化において、「悪路王」は征夷に服従しないため討伐され、斬首された「逆賊」と、「侵略者と戦った郷土の英雄」という両方の意味を持つ。賢治の描く「悪路王」は、闇の世界に属する「黑夜神」⁽⁸⁾ とともにいるため、負のイメージが付けられているととらえたほうが自然であろう。ただし、祖国を侵略されている中国人読者・訳者白樺にとって、「悪路王」はむしろ「侵略者と戦った郷土の英雄」に映ったのではないか。しかしこの反侵略の英雄は原文において悪者の象徴として無残に斬首されてしまった。その死は中国人民に反抗・戦闘を呼びかけようとする白樺にとって非常に不都合だと言えよう。「悪路王」の8行の削除の背後に、この不都合さも一因として考えられるのではないか。全体から見て、「原體劔舞連 (mental sketch modified)」の原作はもともと反抗・戦闘への呼びかけという性格を持つ詩だが、白樺がそれを利用して、書き換えを施し、その反抗性・戦闘性をより明確にした、という解釈が成立するのであろう。

次は萩原朔太郎の「軍隊」であるが、その詩の副題は「通行する軍隊の印象」で

(8) 黑夜神は中夜(午後十時から午前二刻)をつかさどる神で、閻魔王の妃の一人である(原子朗『新宮沢賢治語彙辞典』(東京書籍、1999年7月)による)。

あり、題名通り軍隊の様子を真正面から描き、戦争と緊密に関わる詩であるため、全部引用しておく。(初出は『日本詩人』第2巻第3号(1922年3月)、引用は底本だと思われる『現代詩集』第三巻(河出書房、1940年2月)による⁽⁹⁾)

この重量のある機械は
地面をどつしりと壓へつける
地面は強く踏みつけられ
反動し
濛々とする埃をたてる。
この日中を通つてゐる
巨重の逞しい機械をみよ
黝鐵の油ぎつた
ものすごい頑固な巨體だ
地面をどつしりと壓へつける
巨きな集團の動力機械だ。
づしり、づしり、ぱたり、ぱたり
ざつく、ざつく、ざつく、ざつく。
この××な機械の行くところ
どこでも風景は褪色し
黄色くなり
日は空に沈鬱して
意志は重たく壓倒される。
づしり、づしり、ぱたり、ぱたり
お一、二、お一、二。
おおこの重壓する
おほきなまつ黒の集團
浪の押しかへしてくるやうに
重油の濁つた流れの中を

(9) 羽田朝子は論文において、特輯で取り上げられた作品の殆どが『現代詩集』に収録されているため、『現代詩集』が訳文の底本だと主張している。「軍隊」の場合、『現代詩集』収録の原作と特輯における訳文は完全に一致しており、ゆえに羽田の主張は合理的だと考える。

熱した銃身の列が通る

無数の疲れた顔が通る。

ざつく、ざつく、ざつく、ざつく

お一、二、お一、二。

暗澹とした空の下を

重たい銅鐵の機械が通る

無数の擴大した瞳孔が通る

それらの瞳孔は熱にひらいて

黄色い風景の恐怖のかげに

空しく力なく彷徨する。

疲労し

困憊し

幻惑する。

お一、二、お一、二

歩調取れえ！

おおこのおびただしい瞳孔

埃の低迷する道路の上に

かれらは憂鬱の日ざしをみる

ま白い幻像の市街をみる

感情の暗く幽囚された。

づしり、づしり、づたり、づたり

ざつく、ざつく、ざつく、ざつく。

いま日中を通行する

黝鐵の凄く油ぎつた

巨重の逞しい機械をみよ

この××な機械の踏み行くところ

どこでも風景は褪色し

空氣は黄ばみ

意志は重たく壓倒される。

づしり、づしり、づたり、づたり

づしり、どたり、ぱたり、ぱたり。

お一、二、お一、二。

『現代詩集』に掲載された「軍隊 通行する軍隊の印象」では、2カ所が伏せ字となっており、「日本現代詩選譯特輯」における訳文のそこも伏せ字のままである。全集を確認すると、そこは本来「兇逞」であることがわかった。萩原朔太郎が批判的な目線で戦争をとらえていることは明らかである。『現代詩集』におけるバージョンおよび「日本現代詩選譯特輯」の訳文において、「兇逞」という端的な批判的形容詞が消されても、詩で描かれている戦車の圧迫感・破壊性・恐怖、また兵士たちの疲労・憂鬱などがそのまま残され、戦争のもたらした「翳」を際立たせている。明らかに、翻訳者及び特輯の編集者はこの詩を翻訳紹介することにより、暗に「翳」しかもたらさない戦争を非難しているのである。こうしてみると、「原健劔舞連」と「軍隊」を収録した「日本現代詩選譯特輯」も前節で論じた「海外文学選輯」と同じく、外国文学紹介という看板の裏に、反戦・反日性を隠していたのである。

ただし、他の翻訳紹介された外国文学作品は隠すための道具でしかない、というのも偏った見方である。「読書会」のメンバーたちは他の媒体にも類似した翻訳特輯を残しており、例えば『大同報』における「海外文学專頁」がそうである。その「專頁」の「特載預告」（『大同報』1940年9月3日号）において、「爲推動今日的滿洲文壇向上發展，本報特約幾位旅日的文學青年舉起奮健的筆，將寫一些比較成熟的作品，翻譯些值得介紹的文字（今日の滿洲文壇を向上させるため、本社は渡日した文学青年たちに、筆を奮い成熟した作品を書き、それから紹介に値する作品を翻訳することを頼んだ）」と書かれているように、メンバーたちは文化人としての立場があり、文壇の不振を変えるには、創作のみならず、翻訳により日本文学を含む外国文学から力を借りることも大事だという共通認識を持っていたと考えられる。ゆえに、外国の優れた作品を翻訳することにより、文壇を向上させるという特輯を設けた基本的な出発点も忘れるわけにはいかない。

三、反日的内容が無事に掲載された経緯

前述したように、「読書会」のメンバーたちは外国の優れた文学作品を翻訳紹介したと同時に、外国の作家の筆を借りて、反抗の声を出していた。このやり方は

確かにかなり遠回しだが、その文字列に含まれる反抗性は、非常に有力なものであったことも否めない。それが無事に『華毎』に掲載された経緯を、もう少し探ってみたい。

「はじめに」でも述べたように、『華毎』は1939年11月から「自由な立場」を宣言しており、その原因は大東亜主義をはじめとする日本側のイデオロギーを一方的に押し付けるだけでは、中国人読者に受け入れられないことを認識したからである。読者に受け入れられないことは、直接雑誌の売り上げ減少につながる。『華毎』はあくまで民間企業『大阪毎日新聞』の分支であり、「利潤追求」が非常に重要な側面である⁽¹⁰⁾。ゆえに、「自由な立場」という宣言は建前ではなく、かなり本格的なものである。そして、その「自由さ」の具体的な表れの一つは、日本人編集者の消極的な管理、というべきである。その証明として、まずは「読書会」メンバーの一人、但娣の回想（田琳『爲「長夜螢火」誕生而歡呼』、『東北文学研究史料』第5輯）における「日本總編並不檢查這些文章（日本人編集者は文章をあまりチェックしなかった）」という一文を挙げたい。

また、戦時下荒廃していた中国大陆文壇⁽¹¹⁾を再建するという大義名分の元で、『華毎』は度々懸賞金をつけて文壇新人の作品を募集していた。その際、受賞作の選定をめぐる編集室の談話もたまに載せている。たとえば中篇小説の選定をめぐる談話（「審選室談話」、『華文大阪毎日』第5巻第9期、1940年11月）において、当時の編集主任である原田稔の発言は、応募した原稿が増えるにつれ、編集室はプレッシャーを感じるが、大陸文壇の発展を思うと喜ぶ、という中身の無い感想になっていた。それに比べて、柳龍光、魯風をはじめとする中国人編集者は作品の良し悪し、題材、主義といった選定と実際に関わる話をしていた。この比較から明らかなように、受賞作の選定における原田稔の仕事ぶりは、但娣の回想「日本人編集者は文章をあまりチェックしなかった」と一致していた。こうした消極的な管理が、反日的内容を嵌め入れるすきまを提供したと言えよう。

ところが、中国人編集者はこうした反日的内容を嵌め入れるのに比較的的好都合な言説環境の上に、もう一層の保障をつけたのである。それは時政の部分において「日中提携」「大東亜共栄圏」といったスローガンに迎合する文章⁽¹²⁾を執筆す

(10) 岡田英樹ほか『「華文大阪毎日」解説・総目次・索引』、不二出版、2023年7月。

(11) 無論それは「淪陷区」に限ってのことである。

(12) 例えば柳龍光による「調整中日國交條約中日滿三國共同宣言成立觀體前後」（『華文大阪毎

ることにより、日本人編集者に誠意表明をすることである。これらの文章は読者に無視されることが多いが⁽¹³⁾、日本人編集者の信頼を買ったと考えられ、カモフラージュ、あるいは後ろ盾のようなものとして、巧みに嵌め込まれた反日的文章の無事な発表をより強く守っていた。

おわりに

『華毎』に反日的文章が現れたというかなり劇的な結果は、実は多重の〈後ろ盾〉の共同作用があってこそのものである。具体的には、「天の時」「地の利」「人の和」という三重に分けることができる。『華毎』は本来思想戦の重要な武器として位置付けられており、軍国政府から十分に信頼されていることが「天の時」、中国の購読者たちを引き寄せるために編集主幹平川清風が宣言した「自由な立場」、およびそれとつながる日本人編集者の消極的な管理は「地の利」、中国人編集者たちが「大東亜共栄圏」に迎合する文章を書いたことは日本人編集者に信用され、「文藝欄」の内容が大目に見られたことと、外国文学紹介という看板を巧みに利用したことなどが「人の和」ということができる。こうした三重の〈後ろ盾〉に守られた『華毎』は、厳しく検閲されることはなく、かえって中国人編集者たちの巧みな働きにより、反日的文章を載せる媒体となったのである。ところが、反日的文章は翻訳特輯のみならず、文学創作の部分にも見られる。ただそこには中国人編集者による別の策略が取られており、詳しい考察は次稿に譲りたい。

付記 本稿は2022年度中央高校基本科研業務費専項資金「《華文大阪毎日》雑誌研究——以翻訳文学選輯を中心」(項目番号: 63232118) の研究成果の一部である。

日』第5巻第12期、1940年12月)。

(13) 穆穆「六年文藝話北平」(『太平洋周報』第1巻第87期、1943年11月) 参照。